

かわかみ通信 むすび

2022年5月
皐月号

回想、父 川上正志

この号が発行される頃コロナはどうなっているでしょうか？またウクライナはどうなっているでしょうか？不安で、悲しい事ばかりの人の世ではあります。しかし私達は「木を植えねばならない」のだそうです。

さて今回は前回に引き続き川上季石の句碑巡りです。越前町鰯ヶ岬？ 錢ヶ浜園地にそれは建てられていました。

「涛音はふるさとの音水仙花」というものです。

帰りに、父が越前町に帰り仕事を始めた小樟集落の医院跡に立ち寄りました。ちょうど道端にご婦人が出ておられたので、いろいろお話を伺うことが出来ました。

父は小樟の小さな漁村から出て現北陸高校に入学。卒業後福井師範学校と金沢医専とどこかともう一つ合格し、本人は師範学校に入り教師になりたかったらしいのですが、助産師（そのころは産婆？）の姉に医専にと勧められたそうです。正確には覚えていませんが、高校、大学時代は柔道、バレーの選手として活躍したようです。のちに敦賀に住むようになってからもこの二つの競技には関わっており、そのご縁で体育協会立ち上げに関与することになりました。医専時代は戦争のただ中で、医専へという勧めもそのことが関係していたかも知れません。しかしそのような家族の思いを無視したかのように、学徒出陣で船舶特攻隊を志願します。その後陸軍軍医学校



学生時代の正志さん



軍医の正志さん

の先輩に軍医への道に導かれ、広島にて終戦を迎えることになりました。当然原爆に遭遇しているわけで、新型爆弾が落ちたとの一報があったそうです。朝鮮王朝の皇太子が広島におられたようで、（戦国時代、今川家におられた徳川家康のような立場）その方も被爆され一番先に父のいる陸軍病院に運び込まれたそうです。

その後広島に救援に入りましたが、それは言葉に言い表せないほど悲惨な状態だったそうです。

「原爆忌手当てかなわぬ無念の日」 きわむ

終戦後、大学に戻りましたが間もなく軍医は戦犯とされ公職追放となり、故郷の越前町小樟にて医業を開業することになります。この頃の小樟には水道はなく、毎朝の水汲みは大変だったと母から聞いたことがあります。先述のご婦人によれば、医業は水を沢山必要だからでしょうか？本当に水汲みはお辛そうでしたとのことでした。この事も原

因で敦賀へ出られたのではともおしゃってました。

「手荒れるや一日の水汲み難し」 きわむ

母の故郷である敦賀へ出てきたのは、私の3歳の時だと思います。石などの運搬船にて越前町を後にしました。海沿いの道にはむしろ旗が立ったと母が申していました。越前町の方々が名残を惜しましたのでしょうか。敦賀へは川崎の岸壁に着いたのではとうすら記憶しています。

敦賀では松原小学校の前で開業しました。とても忙しく働いていた記憶しかなく、家族旅行などとんでもない事でした。しかしその時代はどこの家庭でも同じだったのでないでしょうか？その中でも既に始めていた俳句やバレーなどにも一生懸命でした。俳句のご縁で県文化協会の会長を務めたり、敦賀市の文化協会にも関わりました。一方子育て、家庭内の事は、母任せで住み込みの従業員の方々もおられたので、毎日の食作りは大変だったろうと思います。父はお酒と宴会が好きで、年末年始はクリスマスパーティーに始まり、三が日は毎日百人をはるかに超えるお客様が見えられ、私も接待係に出されました。私が敦賀へ帰った、平成元年ころには、世の中のお祭り騒ぎムードはバブル崩壊とともに無くなり、ようやく家族水入らずの正月が出来る様になりました。また医院に関する煩わしいことからも解放され、俳句や旅行など悠々自適の生活のように見えましたがどうだったのでしょうか？

もともと忙しいのが嫌いではない父でしたから、退屈していたかもしれません。とは言え顔を見ないなと思っていたら、青森まで民謡の師範の免許をとりに行ったりもしていたので時間を有効に使っていたのではないかと思います。私が帰って少しでも父母が楽に老後を過ごせたのであれば何よりですが、どうだったでしょうか？



バレーボール選手時代の正志さん



民謡を唄う正志さん

それについても、母は大変だったろうなとあらためて、ご苦労様でしたと言いたい思います。父母の心の中を伺い知ることは出来ませんが、皆様のご支援を頂き、充実した人生を大過なく終えることが出来たのではと振り返っています。皆様に心より感謝申し上げます。

「父の句碑涛音と共に菜花咲く」 きわむ

川上医院 院長 川上 究

つるがの細道

よたよた歩きの奮闘記

第一六十弾

かわかみ書きをめぐるまき

【川上季石を巡る巻パートⅡ】



入口にある立て看板

今回は「よたよた歩きの奮闘記」のNo.54 瞳月号の続きで、「川上季石を巡る巻」パート2である。1面では究先生の父上正志さんへの思い出と共に、2面ではいつものよたよた散歩をお届けしたい。前号では敦賀にある季石さんの句碑を見て回った。今号では正志先生の生家があつた越前町の「銭ヶ浜(せにがはま)園地」駐車場に季石さんの句碑が建っていると以前新聞で見た記憶があったので、足を延ばすことにする。

そこまで、よたよた散歩といふわけにいかず、車でひとつ飛び。といつても、結構距離がある。出発して、1時間以上かけて到着。日本海を望む風光明媚なところにそれはあつた。

記事の後半には「越前海岸を愛し、風景と暮らしを詩に詠んだ南さんの詩碑が、自分の句碑と並ぶ地に落ち着いたことを川上さんも喜んでいるだろう。海を見たような気がした」と結んで



季石さんの句碑。まあでかい。日本海をバックにハイパチリ

けつこう大きく立派な句碑にびっくり。「涛音はふるさとの音水仙花」季石、とある。その横には同町出身の南信雄さんの詩碑が建っている。越前町出身の文人二人の碑が並んだ。新聞

こうしてみると晩年の正志さんしか知らない小生は、改めてすごい人だったのだと思い知られた。冬は波が高く荒海だけど、今は実に穏やかで静かな日本海だ。しばし、海を眺めながら正志さんに思いを馳せる。



同郷の南信雄さんの詩碑が並んで建つ



ミュメント「水仙の郷」

句碑を後にし、少し走ると小樟(ここにぎ)という場所に出る。ここは川上正志さんが生を受けた土地であり、川上医院発祥の地でもある。Qちゃん「確かにここら辺と違うやろか」車を止め、少し歩いてみる。玄関前にご婦人が立っていたので「ここら辺で昔川上医院という病院があつたのを存じですか」と尋ねると、「ああそれやつたから、すぐそこの建物やわ」と答えた。Qちゃん記憶力がすごい。今の建物は現所有者が建て替え、倉庫になつてゐること。その人の話では「昔ここらは飲

季石さんを巡る散歩を終え、帰途に就く車内で「あつ、あの場所で俳句詠まんとあかんかつたね」との問い合わせ、Qちゃん即座に「詠んだで」とおっしゃる(句作は表面に掲載)。さつすが、早いね。あいにく小生浮かばず、撃沈。



元川上医院があつた場所

大変で、奥さんが苦労していたみたいやで」と話をしていた。その後敦賀に転居したことだつた。正志さんの若いころ、この場所で川上医院最初の開院されたのか。Qちゃん感慨深い表情に耽る。

それにつけでも、出生地でこれだけ大きな句碑を建てるという文学思考というのは、それだけ正志先生が偉大ということだけが、地域の文学者を顕彰する土壤が越前町にはあるということだ。敦賀にもそういう文学を顕彰する考え方があるといふのが。せつかく松尾芭蕉の杖置きの地なのに。

よいのだが。せつかく松尾芭蕉の杖置きの地なのに。

その後に越前町を後にすることであつた。

以上



晩年の正志先生



まさに奇遇だ。今回行った越前町の句碑の横にQちゃんと同じ場所に立つ



これは貴重な写真。正志さんと父上。究先生のお祖父さん

【発行】令和4年5月9日(月)

(月月号)

かわかみ通信むすびNo.56

医療法人川上医院
福井県敦賀市松原町1-39
TEL:070-22-0977